



# 近江の古鏡 I (総説)

近江出土の古鏡についてその大要を紹介しましょう。しかし古鏡と言っても、弥生時代や古墳時代の遺跡から出土する鏡、正倉院御物などに見られる唐代の鏡、平安時代中葉以降にわが国で作られた鏡など、それぞれ分けて考えられています。古墳時代以前の鏡は、中国で作られた鏡がわが国にもたらされたものと、それを真似てわが国で作られた鏡があり、それぞれを舶載鏡・仿製鏡とよんで区別しています。また、平安時代以降わが国で作られた鏡は和鏡とよばれています。古い時代の鏡でも国産の鏡を「ワ鏡」とよぶことがありますが、この場合は平安時代以降の和鏡と区別して、倭鏡と「倭」の字を使っています。舶載鏡は前述の如く中国で作られ、それがわが国に渡って来たものですが、これらを含めて中国製作の鏡を、それぞれの作られた時代により、前漢鏡とか後漢鏡、魏晋鏡などとその時代の王朝名で細かく区別する場合があります。しかし、これも厳密にはその文様と製作年代の間に若干のズレを生ずる場合もあり、前漢式鏡というように「式」の字を加えてよぶ場合もあります。これとよく似た言葉ですが、漢式鏡の名で舶載鏡、仿製鏡の区別なくこれら古墳時代以前の鏡を一括する呼び方も見られます。そのほか、後の唐鏡に対し、中国の南北朝以前の鏡を漢鏡とよんでいる例もあり、また、唐代や宋代の鏡でも中国から輸入されたものを舶載鏡とよぶ場合もあるようです。いずれにしても、使われている言葉が何を意味するのか、充分注意する必要があります。この小文での対象は近江出土の古墳時代以前の鏡に限定しており、用語としては、

読者の便宜を考えて、従来から比較的広く使われている舶載鏡・仿製鏡を使用します。

さて、鏡はもともと物の姿を映すための道具で、現在ではガラスを材料とした平面鏡が中心です。しかし、ガラス製の鏡が使用される以前には、金属の表面を磨いて姿を映していました。材料には青銅が多く使われていたようです。鏡の表面は平滑であることが大切な条件で、表面に凹凸があれば映像は乱れます。したがって、鏡面の凹凸を無くすために丹念に磨いたようです。しかし、裏面は物を映すのには関係がありませんから、いろいろな模様が画かれました。鏡の名称はこの模様によって名付けられることが多く、製作の時代もこの模様で判断するのです。たとえば、大津市大萱3丁目の織部山古墳出土鏡の「四神四獣鏡」という名称は、その裏面の模様中国の伝承に従った4体の神仙像と4匹の霊獣の模様があるところからこの名が付けられているのです。和鏡でも同じで、和鏡には日本的な花鳥などが描かれていることが多く、例えば高島郡今津町井ノ口出土の和鏡が「秋草双鳥鏡」と名付けられているのもその模様によるのです。博物館などで鏡を陣列する時は、この裏面の模様を展覧しております。なお「かがみ」という言葉は、本来の物の姿を映す鏡から発展して、「模範」とか「歴史」とかを表わす言葉としても使われています。有名な浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」の「鑑」、<sup>おおかみ</sup>「大鏡」や<sup>ますがみ</sup>「増鏡」の「鏡」はすべてこのような意味で使っているのです。もちろん、この小文は本来の鏡についての説明です。

次に、鏡を特に取り上げる理由について一

言触れておきましょう。古代のわが国では、鏡は単なる調度品ではなく、宝器として重要な意味を持っていたようです。そのことは、古墳の副葬品としての埋納の仕方を見ても、鏡は人体の頭部に近いところなど、重要な位置に置かれています。古事記や日本書紀に現われる、所謂天孫降臨の際の天照大神の神勅に見られる鏡に関する伝承や、それをふまえた三種の神器の一つである八咫鏡などにも、古代におけるこのような鏡に対する思想が現われています。したがって、何処の古墳でどのような鏡が出土したかを知ることは、その古墳の主の社会的な地位を推測するうえで、欠くことのできない資料の一つとなるべきでしょう。このように、古代の地方の実体を知るうえで、出土の鏡が重要な手掛りを与えてくれるのです。ただし、このように鏡に特別の霊力を感じたのはわが国だけではないようで、鏡については世界の各地でさまざまな使われ方が見られます。

なお古鏡に関する二三の問題を総括的に述べてから、県内出土の古鏡について具体的な説明に入りましょう。最近学界で問題になっている鏡に「景初四年」銘の鏡があります。これは京都府福知山市の広峰15号墳出土の鏡に「景初四年云々」の銘があったことで問題となったのです。景初四年というのは中国には無い年号なのです。景初は中国の魏の国の年号ですが、この景初は三年で終り、景初四年は正始元年となりました。西暦240年のことです。有名な倭の邪馬台国女王卑弥呼が魏に使を遣わしたのは景初三年でした。景初四年の問題は今ここで論ずべきことではありませんが、いずれ後でまた触れることとなります。舶載鏡の中には、全部ではありませんがこのように銘文を持つものがあります。県下出土の古鏡にも銘文を持つ舶載鏡が15面あります。舶載鏡の銘文では、「景初四年」銘のようにその鏡を作った年の年号を記すことは稀ですが、何処の銅を使って誰が作ったとか、

この鏡を持つ人は出世するし、その子孫は繁栄するなど目出度い言葉を述べる場合が多いようです。そうして、その文章には中国古来の思想による言葉が多く使われています。この銘文は鏡背の内区の周囲に銘帯を作ってそこに書かれたり、鈕とよばれる中央の紐を通す部分のまわりに書いてあったりします。仿製鏡の中には、和歌山県の隈田八幡宮所蔵の画像鏡のように、わが国の古代史を考えるうえで貴重な資料を提供してくれる銘文のある鏡もありますが、これなどは例外と言うべきです。そうして、中国の鏡を忠実に真似ようとしたわが国の鏡作りの工人が文字を解さないためか、舶載鏡の銘帯の部分を真似て、そこに文字に似て文字にならない線を並べているだけのものが少例ながら見られます。県下の出土鏡では、栗太郡栗東町の新開1号墳北棺の出土鏡や、坂田郡近江町の山津照神社境内古墳の出土鏡に、このような偽銘帯があります。

次に、前述の鈕に関連してのことですが、鈕とは鏡背にある紐を通す部分のことで、鏡背の中央に半球状のものが1個あるのが普通です。ところが、古鏡の中でも古い時期の鏡の中に、鏡背一面に線文が施されており、一方に片寄って鈕が2個（外国の例では3個のものもあります）並んでいて、その形は矩形のそり橋状のものがあります。これを多鈕細文鏡とよんでおり、出土例は非常に少ないのですが、銅鐸や銅剣と一緒に出土する例があって注目されています。この多鈕細文鏡（中には粗文鏡とよぶべきものもあります）は中国本土では出土例が無く、朝鮮半島を中心に中国の遼寧省内やシベリアの沿海州に見られる鏡です。なお、この鏡には凹面鏡がありますが、これは注意すべきことです。前述のように現在の鏡は平面鏡ですが、中国の古代の鏡も平面鏡か、やや凸面のそりを持つ鏡かのどちらかです。ところが多鈕細文鏡には凹面鏡があり、これでは姿を映すのには適しませ



ん。したがって、姿を映すのではなく、何か他の用途をもった鏡と思われます。その出土地域にはシャーマニズムという巫女による宗教的な行為が盛行していたようですから、それに関係するものかもしれません。この多鈕細文鏡はわが国では6例しかなく、県下では出土していません。

鏡に関する学界で、今大きな関心を集めている問題は三角縁神獸鏡に関する論争です。この三角縁神獸鏡は県下でも10面の出土が見られますので、このことについてその概要を述べておきましょう。個々の鏡については後に説明する予定ですので、ここでは論争の概要を述べるにとどめます。まず、三角縁神獸鏡とはどのような鏡でしょうか。前述のように鏡の名称はその鏡背の模様によって名付けられますが、これは鏡背の模様が神像と獸像の組合わせでできており、その像の数により三神三獸鏡などとさらに細かく名付けられています。中には神像が無くて獸像だけのものもあり、三角縁竜虎鏡とか三角縁盤竜鏡などとよばれています。次に三角縁というのは、鏡の縁の形の断面が三角形状に大きく立ち上っているところから名付けられました。古鏡の縁には七面縁、平縁、斜縁、三角縁などがあり、前述の多鈕細文鏡の中には蒲鉾縁とよばれる断面半円状のものがあります。県下で見られる鏡縁は平縁、斜縁、三角縁です。

この三角縁神獸鏡については、その製作の時期について種々の説がありましたが、後には魏の鏡であろうという意見が有力となりました。ところで、この種の鏡はわが国の前期古墳の副葬品として多く発見されています。一方、有名な「魏志倭人伝」（正しくは三国志魏書中の烏丸鮮卑東夷伝倭人の条）に、邪馬台国の女王卑弥呼が景初三年に魏に遣使し、その使者が翌正始元年に他の多くの品物と共に銅鏡百枚を貰って帰ったという記事があります。この鏡が卑弥呼から各地の豪族に賜与され、古墳に副葬されたのだとされるように

なりました。倭の遣使はその後も行なわれており、舶載といわれる三角縁神獸鏡は現在約300面が発見されています。ところが、近年中国で遺跡遺物の調査が全国的に行なわれるようになり、鏡も多くの発見がありましたが、この三角縁神獸鏡だけは、日本で多く出土しているにもかかわらず、中国では一面も出土していません、また、三角縁神獸鏡はその模様の系統から見て、華北の魏の鏡というよりは華中の呉の領内で作られた鏡と見るべきであるという意見もあらわれました。中国におけるこのような考古学的な見地から、三角縁神獸鏡は魏の鏡ではなく呉の鏡であろうとか、中国の鏡でなく国産の鏡であろうなどと言われるようになりました。そうした中で、中国の考古学者王仲殊氏が呉の工人が日本に渡って日本で作った鏡であろうとの説を発表され、これに対する賛否が学界をにぎわすようになりました。そのさ中に「景初四年」銘の三角縁盤竜鏡が発見されたのです。即ち、魏では改元されているのに以前の年号が鏡銘に使われているわけです。これは魏から遠く離れた日本での作だから、改元の報が届かなかっただろうというのです。このように三角縁神獸鏡は魏の鏡で、魏から邪馬台国に贈られたということに反対する内外の学者があり、さらにそのような意見に反論する意見もあって、現在この鏡に関してはいろいろな立場から多くの学説が述べられています。なお工人が日本に渡ったとする意見の一つの証拠に、野洲町大岩山古墳の三角縁神獸車馬鏡などの銘文中に「海東に至る」という句があることを挙げる説もあります。この銘文については当該鏡の説明で改めて述べることにします。三角縁神獸鏡は日中両国の多くの学者が種々の学説を述べている鏡であることを知っておくことは大切なことです。

（西田 弘氏 提供）

近江の古鏡出土地域一覽

	延喜式、和名抄の郡	現在の行政区画	古墳出土鏡			古墳以外の出土鏡		計
			舶	仿	不明	舶	仿	
湖 西	高島郡	高島郡	0	2	2	0	0	4
	滋賀郡	滋賀郡 大津市(除旧栗太郡)	1	0	1	1	1	4
湖 南	栗太郡	大津市(旧栗太郡地域) 草津市 栗太郡	5	10	2	0	1	18
	野洲郡	守山市 野洲郡	10	6	0	0	4	20
	甲賀郡	甲賀郡	0	2	0	0	0	2
湖 東	蒲生郡 神崎郡	近江八幡市 蒲生郡 八日市市 神崎郡	2	2	4	1	1	10
	愛知郡 犬上郡	愛知郡 犬上郡 彦根市	0	0	1	0	1	2
湖 北	坂田郡	坂田郡 長浜市	1	4	0	0	2	7
	浅井郡 伊香郡	東浅井郡 伊香郡	1	8	1	0	0	10
計			20	34	11	2	10	77

従来舶載とされた三角縁神獸鏡は鏡が舶載したか工人が渡来したかは別として、鏡の実体からここでは一応舶載鏡に分類した。

三上山下出土の獸帯鏡2面の踏み返し鏡については、武寧王陵出土鏡と同型関係にあり、これも鏡の実体から一応舶載鏡に分類した。

古墳出土鏡中の不明欄は、文献には現われるが現物が無く、しかもその詳細も不明の点が多いものである。

古墳出土鏡中の舶載鏡、仿製鏡の分類の中には、現物は無いがそれに対する文献その他から見て、それぞれに分類してほぼ誤りがないと思われるものはその項に入れた。

古墳以外の出土鏡は、住居跡等から出土の小型仿製鏡及び破碎鏡である。

延喜式や倭名抄に現われた郡が古代豪族を考えるうえで参考になるとと思われるので、地域区分については、これを中心にして分割した。

古い郡域と現在の郡市域には多少の出入りがあるが、大津市を除いて鏡出土地に関しては問題は無いと思われる。